

心を育む道徳教育

～自分を見つめ、自分と共に生きている他者との関わりを大切に～

佐々木 恋奈

1. はじめに

平成27年3月に一部改正された小学校学習指導要領には「自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共により良く生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする。」と示されています。さらに、いじめの問題への対応の充実の観点から、いじめの防止の関連としての配慮事項が新たに記載されています。

今回の研究では、児童が道徳的価値について考え、その理解を基に「自分はどうか。」と自分を見つめさせたいと考えました。また、物事を多面的・多角的に考えることはとても大切です。友だちと交流することで様々な見方に触れ、自分を肯定的に受け止め、よりよい生き方についての考えを深めさせることができるのではないかと、またそれが自分を大切にし、同様に自分と共に生きている他者を大切にしようとする心につながっていくのではないかと考えました。

2. 研究仮説

- ①道徳的価値について「自分ならどうだろうか。」と自分を見つめることで自分自身を知ることができるのではないかと。(道徳的価値の自覚)
- ②友だちとの交流からも、自分では分らなかった気づきが生まれ、自分を認める手掛かりとなり、それがよりよい生き方についての考えを深めさせるのではないかと。(望ましい自己の形成)
- ③人は、自分自身を取り巻く他のものとの関わりを持って生きている。よりよい生き方を考えることは、自分を大切にし、共に生きている他者も大切にしようとすることにつながるのではないかと。(望ましい人間関係の構築)

3. 指導観

近年、子どもたちの自尊感情の低下が指摘されています。平成27年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査による「自分には、よいところがあると思いますか」という問いに対しての回答がとても気になりました。「当てはまる」と回答したのは全国の値で36.3%、所属校はさらに低い値でした。

自分を肯定的に受け止めることは自己実現に向かう基盤です。困難なことに直面しても乗り越えようとする意志や力になります。自分を見つめる時間を大切にし、そして友だちとの交流を通して、児童一人ひとりに、自分の持っている良さを気づかせたいと思います。

また、自己肯定感が高まってくると、多様な感じ方や考えがあることを受け入れる心が育ち、友だちの異なる考えも、広い気持ちで温かく認めることができるようになりました。自分の良い所を見つけ、自分を誇ることができる子どもたちを育てたいと思います。

4. 実践内容

①ねらいとする価値に迫る手立て

(1) 役割演技

低学年段階では、具体的な活動を通して思考するという発達上の特徴がみられるので、体験を重視した学習活動を展開することで、自分の気持ちが表現しやすくなるのではないかと考えました。また、役割演技では答えは一つではないことを知らせ、素直に自分を表現できるようにしました。

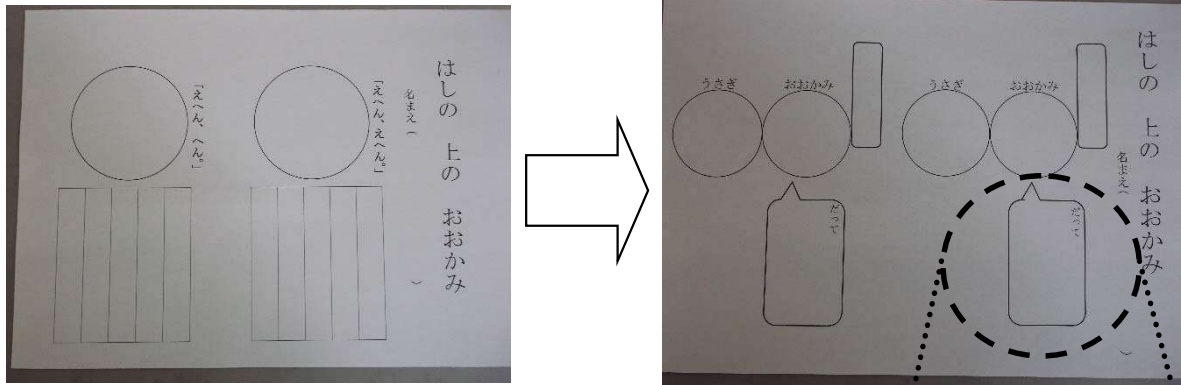
役割演技を行う場面では、お面や役割カードを使いました。これは心のマスクの役割を持っていて、お面や役割カードを媒体にすることで、より自由に語るができるようになりました。

(2) ワークシートの工夫

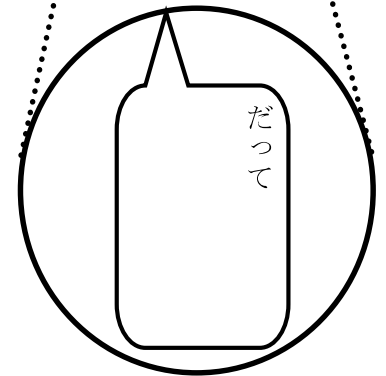
書くことは「そのことをどう考えるのか。」といった、児童の心への問いかけになります。内省への手掛かりとしても大切なものですが、考えたことや思ったことを短時間で書くことは、児童にとって大変な負担です。そこでワークシートに丸枠を置いたものを使用しました。児童はその丸枠を輪郭にして、表情マークを描きます。例えば「嬉しい」という言葉でも、その中にある気持ちは様々です。表情マークを使うことで、微妙な心情を表現することができました。



また、登場人物に吹き出しの枠を作り、そこに言葉を書かせるようにすると、児童はその人物に自分の気持ちを託して本音を書くことができました。



さらに、書くことに苦手意識を持つ児童の支援として、書き出しの部分だけ言葉を置きました。多くの児童がその書き出しに続けて書くことができていました。



(3) 授業後の取り組み

・教室環境

道徳的価値を内面化させ、児童の生活に広げていくには、道徳の授業だけではなく、日常での積み重ねが必要です。これは、友だちからもらった嬉しい言葉を集めたものです。授業で取り組んだ後も教室に掲示をし、児童が自由に増やせるようにしました。



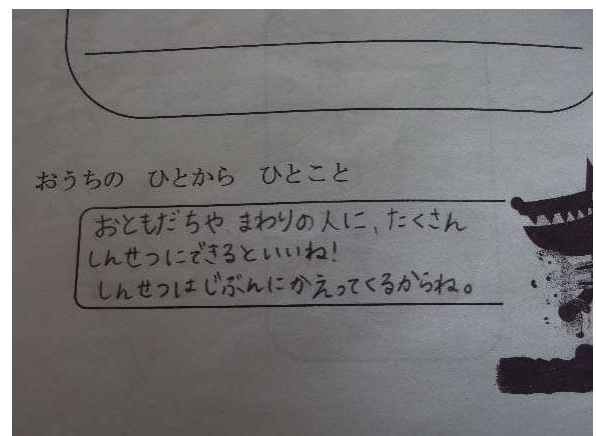
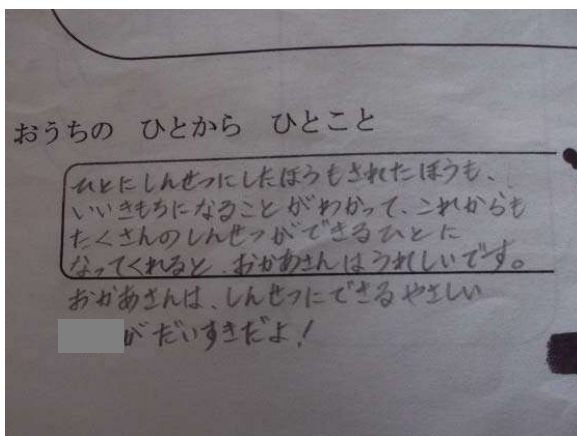
・家庭との連携

学級通信「えがおいっぱい」を発行し、道徳の授業の様子などを載せました。児童が役割演技をしている場面の写真や、児童が書いたもの、保護者向けに授業のねらいも載せました。





児童が振り返りをしたものに、家庭からも一言コメントを記入してもらいました。学校と家庭との連携で子どもたちを育てていくことがねらいです。児童が伝える授業の内容と併せて、学級通信を読み、それに合わせた内容を書いてくれた保護者が多く見られました。児童も家族が自分のことを認めてくれていることを実感でき、とても嬉しそうでした。

教室だけで終わらせず、家庭へ広げ、再び教室へ。



②授業実践

- (1) 主題名 相手の気持ち
- 資料名 くり (日本標準 みんなで考える道徳1年)
- ねらい 内容項目 B-友情、信頼

	主な学習内容	指導上の留意点
導入	1. 3匹のりすの絵を見て、これから読む物語を想像する。	・自由に語らせる。
展開	<p>2. 資料「くり」の範読を聞く。</p> <p>3. 内容を確認する。</p> <p>4. 話し合う。 ○りすたろうが怒ったのはどうしてだろう。 ○怒っている理由は栗がもらえなかったことだけかな。 ○2人はりすたろうになんと言ったらいいかな。</p> <p>5. 考えたことを役割演技する。 ・グループ練習</p>  	<p>・理解ができるようにゆっくり読む。</p> <p>・劇化して、3匹の栗の採り方を捉えさせておく。</p> <p>・りすたろうは自分の働きを認めてもらえないことに怒っていることに気づかせる。</p> <p>・りすきちとりすおになったつもりで、りすたろうに言うことを考えさせる。</p>

	<p>・グループ発表</p> 	
終末	6. 教師の説話を聞く。	

- (2) 主題名 あたたかい心で親切に
 資料名 はしの上のおおかみ
 ねらい 内容項目 B-親切、思いやり

	主な学習内容	指導上の留意点
導入	1. 親切にしてもらった経験や、してあげた経験について発表し合う。	・ねらいとする価値への方向付けを図る。
展開	2. 「はしの上のおおかみ」の範読を聞く。 3. 最初の場면을劇化する。	・理解ができるようにゆっくり読む。

4. ワークシートに書く。

○「もどれ、もどれ。」とうさぎを追い返したおおかみは、どんな気持ちだったかな。



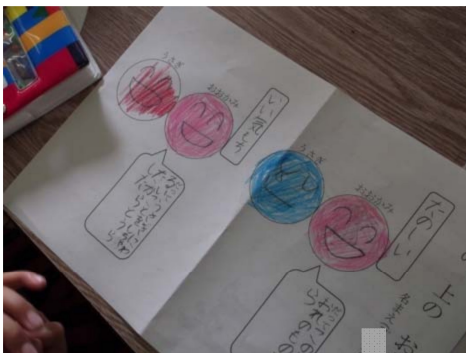
・おおかみは意地悪を楽しんでいることをおさえる。



5. くまとの場面を劇化する。


6. ワークシートに書く。

○「つぎの日」のおおかみは、どんな気持ちだったかな。



・おおかみの心の変容を捉えさせる。

・親切にした時のいい気持ちに共感させる。

	 <p>○おおかみが「前よりずっといい気持ち」になったのはどうしてだろう。</p>	<p>・相手も自分もいい気持ちであることに気づかせる。</p>
<p>終末</p>	<p>7. 「つぎの日」を役割演技する。</p>	

③校内教師の意見・感想

- ・物語のあらすじを劇化しながら読み取ることは、文章のみで読み取るよりも、登場人物の気持ちに共感できたのではないか。
- ・ワークシートの活用について、気持ちを文章に書くことが苦手な児童にも簡単な表情で表現する方法は参加しやすいと思う。
- ・ワークシートの吹き出しに「だって」と書き出しが書き込まれていることは、書かせる支援として有効だった。
- ・登場人物が動物に擬人化された資料を生かし、児童が役割演技を通してイメージを膨らませていた。

5. 評価

平成27年3月に一部改正された小学校学習指導要領の第5章には、道徳教育における評価について「教師が児童の人間的な成長を見守り、児童自身が自己のよりよい生き方を求めていく努力を評価し、それを勇気付ける働きをもつようにすることが求められる。」と示されています。また「学習指導過程に関する評価の資料となるものは、児童の学習状況である。」とも示されています。学習状況を的確に把握する方法として、文章力がまだ身につけていない低学年に自分の思いをどう表現させたらいいのか悩みました。現段階では一部改正された小学校学習指導要領に沿っていない点もあるかもしれませんが、役割演技を取り入れました。台本がある劇と違い、自分らしさを表現できると考えました。(4. ①(1) 役割演技参照)

またワークシートに表情マークと吹き出しを使い、自分の考えを表現させる方法も実践してみました。(4. ①(2) ワークシートの工夫参照)

道徳性は、児童が将来いかに人間としてよりよく生きるかといった、人間形成の問題に関わるものです。評価において道徳的価値を理解したかなどの規準を設定することはふさわしいと言えません。児童が自らの成長を実感し、更に意欲的に取り組もうとするきっかけとなるような評価を目指すことが求められます。

6. 成果と課題

成果としては、何に重きを置くかといった主発問を考え、登場人物の心情を追うことを中心とする授業ではなく、道徳的価値について扱う時間を多くすることができた点が挙げられます。また、お面などを付けることで楽しく登場人物になりきり、その役を通して自分の思いを表現することができました。この方法で授業を継続することによって、よりのびのびと自己表現する児童が増えてきました。役割演技は、演じる児童とそれを見る児童が共に道徳的価値について学ぶことができると言えます。

さらに、授業後の取り組みとして、家庭との連携がとても有効でした。子どもたちは家族のコメントからも、自分が大切にされていることを感じ、自分の存在価値に気付くことができましたと思います。

課題としては、考え議論することが少なかった点です。例えば「はしのうえのおおかみ」では、「お互い気持ちがいい方法」を着地点として、それに向かって自分だったらどうするかについて、もう少し深く考えさせる場の設定が必要だったのではないかと感じました。

7. 終わりに

道徳の授業を重ねることにより、今の自分も好きだけれど、これからもっと自分をよくしていきたいという前向きな思いを自発的に持てるようになってほしいです。道徳の授業はすぐ実生活に生かされるものではありませんし、その効果は目にはつきり見えるものでもありません。しかし、子どもたちが将来にわたって、自分はどうのように生きるのかについて、一人ひとりが考えを深めていけるよう、今後も研究を続けていきたいと思います。

<参考文献・参考資料>

- ・文部科学省『小学校学習指導要領・小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』
- ・光村図書出版株式会社
『よりよい道徳指導のための工夫～道徳の授業を形式化させないために～』